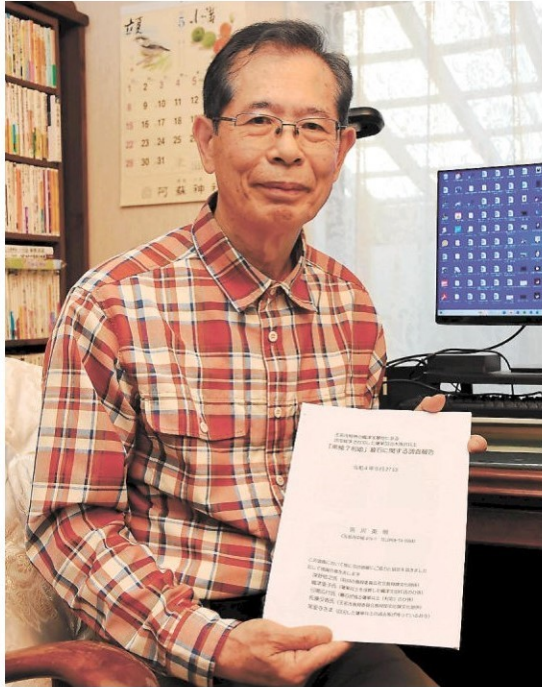


# 薩軍兵士の墓 謎明らかに

玉名市に、西南戦争（1877年）で自決した薩軍兵士が埋葬されたと伝わる墓が1基だけ残っている。熊本高专元校長の宮川英明さん（76）＝同市＝が、この墓について調査報告書をまとめた。これまで不明確だった被葬者の名前や墓が現在まで残った経緯などを、子孫への聞き取りや文献調査で明らかにした。



玉名市の集団自決の地に残る墓の調査報告書をまとめた宮川英明さん＝同市

## 玉名市の宮川さん報告書 名前特定 子孫に聞き取り

墓の周辺は「加治木隊集団自決の地」と呼ばれる。加治木町（現鹿児島県始良市）出身者でつくる薩軍加治木隊の隊員16人が、官軍に追い詰められ、集団で切腹した場所とされる。長く忘れ去られていたが、1997年に玉名市立歴史博物館が、同市下地区で兵士の名前が彫られた墓石を発見。調査で、西南戦争で県内最大規模の集団自決が判

明した。ただ、自決者の遺骨のほか、とんどが遺族に引き取られたと伝わる一方で、1人だけが残された理由は不明だった。墓石に彫られた名前の「東楠」に続く「苟」に似た崩し字が特定できず、97年以降は鹿児島県の地名「東楠園」から「園」と推測されていたが、明確ではなかった。「国の将来を思う若者が



1基だけ残る自決した薩軍兵士の墓石。これまで「東楠」に続く字が特定できなかった

玉名で命を絶った事実を、あいまのままにはできなかった」という宮川さんは、字を特定するため始良市教育委員会に「園」の崩し字の調査を依頼。すると、幕末の古文書によく似た字体が複数発見された。不明だった字は、薩摩地域の「園」の独特な崩し方で彫られており、名前を「東楠園利助」と断定した。

また、鹿児島に住む兵士の遺族を訪ねて聞き取り。「東楠園」家は兵士の養子縁組先で、出征前に縁組を解かれ、自決時には姓が「弓場」に変わっていたとの証言を得た。墓石を奉献したのは、兵士の幼なじみだったことも判明した。

宮川さんは聞き取りや文献から、墓が残った理由を「出征前に養子縁組を解かれ、姓が変わり、自決の報告が遺族に届かなかったため」と推定。宮川さんは「墓の由来や自決の歴史が、報告書で後世に伝わればいい」と話している。

（丸山伸太郎）